

長崎の教会群とキリスト教関連遺産 — 長崎から世界遺産を！ —

第17回目



■はじめに

今号では、南島原市にある構成資産「日野江城跡」と「原城跡」をご紹介します。

「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の構成資産は、城跡、歴史的景観の中に建つ教会堂、そして禁教時代の聖地を含む集落の3つに分類されますが、その城跡にあたるのが、キリスト教の繁栄を示す「日野江城跡」と、海禁（いわゆる鎖国）の契機となる島原・天草一揆の舞台「原城跡」です。

■日野江城跡（ひのえじょうあと）（国史跡）

肥前西部（長崎県）地方の戦国大名であった有馬氏の居城跡で、豊臣秀吉との密接な関係を物語る金箔瓦や、海外貿易による陶磁器が出土し、城内には仏塔を使った階段遺構や独特の切石技術を用いた石垣などが発見されています。日野江城には西洋人の宣教師や商人が訪れ、1584年8月31日付けのフロイス書簡には、「日野江と称する城があり、ここに有馬氏が住んでいる。ここに下の地方の神学校を有し、貴族の子弟多数を収容している」とあり、また、スペイン人商人アビラ・ヒロンの「日本王国記」では、日野江城の豪華さ・美しさについて「世界最大の君主でも、大よろこびでこれを使われるだろう」と記され、当時のキリシタン文化と有馬氏の繁栄ぶりがうかがわれます。城主がキリスト教へ改宗し



金箔瓦（写真提供：南島原市）
豊臣秀吉の親族や重要な城郭に使用が許され、名護屋城や姫路城、大阪城でも発見された。当時の有馬氏の中央との強いつながりをうかがわせる。



有馬晴信木像（複製）
（写真提供：南島原市）
1580年にキリシタン大名となり、領内のキリスト教化を進めた。

た有馬では領内のキリスト教への改宗が進められ、日野江は東西交流の場となると共にキリスト教の宣教拠点ともなり繁栄を迎えます。この時期に、有馬のセミナリヨ（神学校）から4少年が天正遣欧使節としてヨーロッパへ派遣されました。

日野江城跡には、特徴的な遺構として仏塔を使った階段遺構があります。これまで保存のため埋められていましたが、南島原市では確認調査のため今春から再び掘り出す予定です。調査期間中は見学も可能となりますので、この機会をお見逃しなく。

■原城跡（はらじょうあと）（国史跡）

豊臣秀吉が死去すると、その後の政局をめぐる政治的混乱の予想から、諸大名は城の修築、築城など軍事力の強化を急ぎ、そのような時代背景の中、有馬氏は新たに原城を築城しました。東側は海、それ以外は低湿地で囲まれた天然の要害でしたが、江戸幕府の一国一城令により廃城となりました。一度も領主が居住することなく廃城となった原城ですが、1637年に重税などをきっかけに勃発した「島原・天草一揆」の場として、歴史の表舞台へと登場します。約3万7千人が立てこもり、幕府軍約12万人の攻撃を受け、ほぼ全員が殺されました。原城跡では、多くの人骨とともに十字架やメダイが発掘され、籠城した人々の多くがキリシタンであったことを示しています。また、このことは、当初は領主の政策により始まったキリスト教が、次第に人々の信仰として根つき、領主がいなくなった後も、過酷な弾圧にあっても組織的に継承されていたことも示しています。



出土した信仰具
(写真提供：南島原市)
原城跡では、多くの人骨とともに、十字架やメダイが出土している。

■「有馬キリシタン遺産記念館（仮称）」の開館

南島原市では、これらの歴史を紹介するガイダンス施設「有馬キリシタン遺産記念館（仮称）」（南島原市南有馬町乙1395番地 旧原城文化センター）が4月4日にオープンします。16世紀から17世紀にかけての歴史を物語る貴重な出土品などの展示品を、ぜひご覧ください。

コラム

もう1つの世界遺産候補 「明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域」

平成27年の世界遺産登録を目指す「明治日本の産業革命遺産」については、去る1月、国からユネスコに推薦書が提出されました。今後は、次のようなプロセスを経て、来年夏頃に世界遺産登録の可否が決定されます。

- 平成26年夏～秋 ユネスコの諮問機関（イコモス）の現地調査
- 平成27年5月頃 イコモスの評価結果・勧告の通知
- 平成27年6月頃 ユネスコ世界遺産委員会で登録の可否を審議

県としては、平成27年の登録実現に向けて、周知啓発やイコモスの現地調査への対応など、国・長崎市・所有者をはじめ、関係自治体等と連携しながら、積極的に取り組んでいきます。

※来月号からは、構成資産を順次ご紹介していきます。どうぞお楽しみに。